

氏 名	たかの りょう 高 野 涼
本籍（国籍）	宮 城 県
学 位 の 種 類	博士（農学）
学 位 記 番 号	連研第 741 号
学位授与年月日	平成 31 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当 課程博士
研究科及び専攻	連合農学研究科 生物環境科学専攻
学位論文題目	山村住民の地域認識と今日的山村問題の課題に関する研究 (Study on awareness of locality of mountain village residents and modern mountain village issue)
学位審査委員	主査 准教授 山 本 信 次 副査 准教授 伊 藤 幸 男 副査 教 授 泉 谷 眞 実 副査 准教授 林 雅 秀

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

従来の山村研究では、社会経済システムによる山村の規定を分析するマクロな視点と、山村に暮らす住民の生活構造を分析するミクロな視点が主であった。これらの従来の視点では山村問題は産業や生活環境の整備の遅れとして捉えられ、困難な産業振興に終始したり、生活条件の保障にとどまる等、山村研究は展望を描けず閉塞的な状況にある。同時に、近年林業経済研究や森林政策では山村と森林・林業の分断とも言える状況が生じている。具体的には、木材生産や多面的機能の発揮のために森林の適切な管理・利用を重視する視点が強まり、山村の展望を描く上で森林の意味合いを重視するような視点が後退した。以上を踏まえ、山村問題を新たに捉え直し、かつ山村研究と森林・林業研究を結び直すような認識枠組みが必要ではないかというのが本研究の問題意識である。

先行研究では、多くの山村は自家用車を運転できれば近隣市街地へ移動可能な距離圏内にあり、都市的な消費生活を送る上で大きな支障はないとされてきた。本研究では、山村研究を前進させる視点として、こうした現代山村の生活空間が、今後山村社会の存続を担う若者や若年女性の視点からどのように評価されているのかを明らかにした。また、山村と森林・林業の分断については、田園回帰し農林畜産複合経営に取り組む若者や、森林経営と森林の多面的利用に取り組む住民の視点から、山村の展望と森林は切り離されているのか、そうでなければどのような意味において結びついているのかを明らかにした。振興山村に指定されている宮城県登米市米川地区の分析からは、以下の点が明らかとなった。

第一に、Uターン・婚入・田園回帰を含めた若年女性の生活実態と、生活空間としての山村の評価を把握した。日常的な生活では全員が自家用車を運転し片道 30 分程かけて市街地を利用しており、経済的にも大きな問題は見られなかった。一方で、生活空間としての山村に対する評価は、個人の経験や価値観を背景として、その不便さに対し強い不満を感じているものから、利便性よりも山村の自然や自給的側面を重視して満足しているものまで多様性が存在した。このことは、最低限の生活条件が保障されたとしても、山村の生活条件は個人の価値観によって相対化されるため山村問題は解消しないことを示唆している。

第二に、田園回帰した若者が山村を好ましい場所として評価する価値観や労働観、森林の位置づけを把握するため、農林畜産複合経営に取り組む K 氏の事例を分析した。K 氏の経営は、

山村の自然資源を利用しながら楽しく暮らすライフスタイルの実現を重視していた。また、効率性や生産性の向上を志向する林業の成長産業化の方向とは異なり、生活と一体となった林業労働が重視されていた。さらに、こうしたライフスタイルや価値観を受け止めるものとして、森林は重要な位置を占めていた。この分析からは、山村振興における農林業振興のあり方は産業化が唯一の方策ではなく、山村に暮らす意義や楽しさに結びつくような農林業経営を支えることが重要であることが示唆された。

第三に、木材生産の効率化や環境配慮型の森林経営を行いながら、地域住民と結びついた森林利用を展開してきた米川生産森林組合の事例を取り上げた。同組合のキーパーソンである S 参事を対象に、森林経営や地域認識と結びついた森林利用の意味付けを把握した。その結果、林業生産の効率化や環境配慮は経営対応として行われていたが、森林・林業問題の解決がすなわち山村問題の解決に結びつくものとしては認識されていないことが明らかとなった。一方で、小学生の森林体験学習や林業女子会の活動支援といった森林利用は、若者が地域に残り地域が存続していくことを願い、そのためには子どもの頃から愛郷心を育み、地域の魅力や文化を伝えていくことが必要だという考えに基づいていた。その背景には、S 氏が山村問題を雇用や生活問題にとどまらず、若者の地域に対する関心の希薄化や家督制の喪失といった意識の変化からも捉えていることが関係していた。すなわち、森林は子供や若者と地域を結びつける愛郷心を育む場として重要な意味が与えられていた。

以上から次の点が指摘できる。これまでの山村問題では、所得や生活環境の都市との格差や、それを解消するための産業振興が課題となっていた。しかし、たとえそれらの課題が解消されたとしても、山村に暮らす意味や意義をもたない人にとっては、山村は単に都市と比べて不便な場所としか認識されなかったように、山村の生活条件は価値観によって相対化される。それゆえに、山村問題の解決に向けては、山村の生活条件の改善だけではなく、若者が山村に暮らす意味をどのように捉えるのか、当事者の価値観や思いが重要になってくる。このように山村問題を捉え直したとき、森林は愛郷心や楽しさといった山村に暮らす意味を醸成したり、あるいはそれを受け止める要素として、むしろ山村の展望とは切り離せない意味を持ち得るのである。

## 論文審査の結果の要旨

従来の山村問題研究は、社会経済サービスへのアクセシビリティの劣位が問題とされ、個別具体的な問題への対応に終始する傾向にあり、山村を展望する新たな論理が生まれにくくなってきている。さらに、山村の主たる資源・産業として論じられてきた森林・林業問題は、収穫段階に至って産業化するにつれ、山村の展望と切り離して論じられるようになってきた。こうした背景から、本論文は、山村問題研究を前進させ、森林・林業研究と結びつける問題認識の枠組みと理論の構築を目指し、次の 2 点を具体的な課題としている。1 つは、山村住民は山村をどのような生活空間として認識し評価しているのかを明らかにすることである。もう 1 つは、山村住民の視点から森林は生活や生産とどのように関わり認識されているのかについて明らかにすることである。宮城県登米市東和町米川地区を対象とし以下の 3 つの分析をおこなった。

第一は、30～40 代の若年女性を対象とした山村の生活空間に対する評価に関する分析である。いずれも都市生活を経て U ターンや婚入、I ターンで定住した女性たちの生活空間認識は、都市よりは不便であるものの自家用車が運転できれば日常生活に支障をきたさないというもので一致していた。しかしその評価は、強い不満を感じているものから、山村に価値を見出し満足

しているものまで多様性が見られた。このことから、今日の山村の定住化において、生活条件の整備だけでは十分ではなく、山村に暮らす意義や価値観が山村の「場所性」に大きな影響を与えることを明らかにした。

第二は、米川地区に田園回帰し農林複合経営を実践する若者K氏の山村空間や森林の認識に関する分析である。K氏にとって森林は、山村空間と切り離すことが出来ない一体的なものと認識され、そこでの林業は暮らしをより楽しむための環境づくりともいうべきものであった。山村に価値を見出す移住者にとって森林とは、生活と労働の統合的な自然資源利用の場となっていることを明らかにした。

第三は、米川生産森林組合の経営を担うS参事の地域認識と森林管理に関する分析である。当組合は生産性を向上させ黒字経営を実現している。しかし、S参事はそれだけでは地域の衰退は止められないと考えており、様々な市民・住民参加の活動を展開している。山村にとって森林は、産業的な経営の追求だけでは不十分であり、地域内外の市民・住民と地域とを結びつける「場所性」の形成の場として認識されていることを明らかにした。

本論文は、山村住民の価値観に基づく「場所性」の重要性を明らかにし、問題認識の新たな枠組みを提供したこと、また、森林は山村の「場所性」を形成する重要な要素となっており、山村問題と森林・林業問題を一体的に論じていくこの重要性を指摘するなど、顕著な成果をあげている。

以上から、本審査委員会は、同人を大学院連合農学研究科博士課程修了者としての学力と識見を有する者と認め、博士（農学）の学位を与えるのに十分な資格を有するものと判定した。

#### 学位論文の基礎となる学術論文

高野涼・伊藤幸男・山本信次「山村に暮らす若年女性の生活実態と意識－宮城県登米市米川地区を事例に－」『林業経済研究』Vol.64(2), 2018年, 24～32頁